

A decorative border with floral motifs at the corners and a repeating vine-like pattern along the edges.

新潮日本古典集成

日本永代蔵

村田 穆 校注

新潮社版

新潮日本古典集成 (第九回)

日本永代蔵



定価 一三〇〇円

昭和五十二年二月五日 印刷
昭和五十二年二月十日 発行

校注者 村田 穆

発行者 佐藤 亮一

印刷所 大日本印刷株式会社

発行人 株式会社 新潮社

〒一六二 東京都新宿区矢来町七一
電話 東京 03 (二六六) 五一一一 (業務)
東京 03 (二六六) 五四一一 (編集)
振替 東京 四一八〇八

装画 佐多 芳郎
組版 シーティエス大日本
製本 新宿 加藤製本

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

凡例 五

卷一 一三

目録 一五

初午は乗つて来る仕合せ 一七

二代目に破る扇の風 三

浪風静かに神通丸 二七

昔は掛算今は当座銀 三五

世は欲の入れ札に仕合せ 三九

卷二 四五

目録 四七

世界の借屋大将 四九

怪我の冬神鳴……………五

才覚を笠に着る大黒……………六

天狗は家名風車……………六

舟人馬方鎧屋の庭……………七

卷 三……………九

目 録……………八

煎じやう常とは変る問葉……………八

国に移して風呂釜の大臣……………八

世は抜取りの観音の眼……………九

高野山借錢塚の施主……………九

紙子身代の破れ時……………一〇

卷 四……………一二

目 録……………一三

祈る印の神の折敷……………二五

心を畳み込む古筆屏風……………二二

仕合せの種を蒔錢……………二六

茶の十徳も一度に皆……………二三

伊勢海老の高買ひ……………二七

卷 五……………四五

目 録……………四七

廻り遠きは時計細工……………四九

世渡りには淀鯉の働き……………一四

大豆一粒の光り堂……………一六

朝の塩籠夕べの油桶……………一七〇

三匁五分曙のかね……………一七五

卷 六……………一八一

目 録	一八三
-----	-----

銀の生る木は門口の柵	一八五
------------	-----

見立てて養子が利発	一九九
-----------	-----

買置きは世の心安い時	一九六
------------	-----

身代固まる淀川の漆	二〇〇
-----------	-----

智恵を量る八十八の升搔	二〇五
-------------	-----

解 説	二二一
-----	-----

付 録	
-----	--

西 鶴 略 年 譜	二三五
-----------	-----

近世の時刻制度	二四三
---------	-----

近世の貨幣をめぐる常識	二四六
-------------	-----

凡 例

一、本文の作成については、本文を読みやすい形で提供するために、原文の理解に特別の支障をきたさない限り、近世の特殊な表記を避けて、現代の読者に親しみやすい一般的な表記にとめた。

一、右の立場から、異体の、あるいは、特殊の漢字は現代通用の漢字に改め、一部は仮名に改めたところもある。また、適宜仮名に漢字を当てた。ただし、用字法は必ずしも統一しなかった。たとえば、「七草」「七種」・「空き地」「明き地」・「楠木」「楠」・「掛」「懸」・「流石」「石流」・「課せ方」「負せ方」などの混用が目につくが、強いて統一しなかった。

特殊の文字ながら原形を残したのは、次のごときわずかの例にすぎない。

「徳」(「得」の意)・「大臣」(「大尽」の意)のごとき表記には、町人の意識がはっきり出ているので、原形を残した。

「店」の意で「みせ」と「たな」を読み分ける時は、当用漢字の表記では「店」「たな」と書くが、この本では、原文の「見世」と「棚」の表記に従った。

「咄」(話)・「湊」(港)・「大坂」(大阪)・「歎」(嘆)・「喰」(食)・「智恵」(知恵)・「花麗」(華麗)・「繁昌」(繁盛)・「惣じて」(総じて)・「迄」(まで)などは、現代の読者にも読めぬ文字ではないので、原形を残した。

一、熟合・転成の名詞については、現代の送り仮名法を原則としながら、読み方の難易に応じて、語尾の仮名を残したり、削ったりして、必ずしも統一しなかった。

一、本文の仮名づかいと振り仮名は歴史的仮名づかいに、頭注と傍注は現代仮名づかいに従った。

本文の振り仮名は、一部は作者（西鶴）の指定したものもあるかもしれないが、多くは出版者が読者の便を考えて記したものであろう。従って、原文に必ずしも忠実に従わなくてもよいと考えて、一応は原文の振り仮名に従ったが、自由に取捨もした。例えば、「律義」は「りちぎ」「りつぎ」と、「敷銀」は「しきぎん」「しきがね」と、「家質」は「かじち」「いへじち」と、「棧敷」は「さじき」「さんじき」と、「出入」は「いでいり」「でいり」と振り仮名してあるが、ほとんど、必然性はない。この種の語で、振り仮名のないものは、一応いずれかに振っておいたが、そうも読めるといふにすぎない。「朝夕」は「てうせき」「あさゆふ」とあるが、この場合、振り仮名はすべて省いた。また、「商人」は、西鶴の読例では、「あきびと」「あきうど」「あきんど」とあるが、この作に限り振り仮名は、巻五まではすべて「商人」とある。この表記は、「しょうにん」とか「ばいにん」とか読まないための指定であらう。ただ、巻六だけに「あきんど」と振った例が五か所あるので、それに従って、ここではすべて「あきんど」と振ったが、そう読まねばならぬと思っていない。また、「町衆」は三例あるが、いずれも「町衆」と振り仮名してある。「まちしゅ」「ちようしゅ」いずれに読んでもよいのである。この振り仮名は省いた。また、原文「取て」「打て」など、促音に読むかどうか、限定しない方がよい場合の方が多いのだが、一応どちらかに記しておいた。もともと読む文学は、語る文学とは性質を異にするところがあり、読み方よりは文字面を重んじる

一面のあることを御承知願いたい。

一、句読点は、原文に付けてある場合と、ない場合がある。或る場合は、西鶴の特殊の文体を示すところもなくはないが、かなり無造作なところもあるので、意味本位の読みやすい形の句読に統一した。

清濁についても、当時は濁点・半濁点は加えられないことも多いので、はっきりしないところもあるが、一応私の読み解いた形で、清濁をつけた。清濁は、発音の難易に従って移るところが多いので、あまりこだわる必要はないかと思う。

繰返し記号は、原文には、「ゝ」「ゑ」「／＼」などが用いられているが、漢字を二字重ねる場合に「々」を用いる外は、すべて同字を重ねた。

誤字・脱字の明らかなもの若干は訂正し、多く頭注で断った。

一、段落は原文にはないが、翻刻・注釈の書の多くの先例にならって、段落をつけ、本文理解の便を計った。

会話の部分には「」をつけたが、まま、心中の思いにも「」をつけた。その方が理解に便利と考えた場合である。

挿絵は全部収めた。本文の理解を助ける点が多いからである。なお、この挿絵は東京都立中央図書館所蔵本を参考にさせて頂いた。

一、注釈は、頭注と傍注（色刷り）による。頭注には、語句の説明、傍注には、現代語訳という原則だが、余白の関係と、説明を加える必要上、現代語訳的なものを頭注にまわした場合も少なくない。

い。また、頭注の余白に適宜小見出し（色刷り）を加えた。

注釈の目標は、本集成の趣旨にそって、この作品を原文で読んで、日本の近代文学や外国文学の翻訳を読む程度に、文学として理解できるということである。ただ、頭注は見開きを越えて他の頁にわたらないというきまりなので、いささか無理をしたところもある。

語釈は、従来の研究を勘案して、なるべく簡略にした。出所を一々断るだけの余白はなかったが、主な出所は後に付す諸注釈書である。詳細な注解を必要とする向きは、それらに就かれない。

ただ、従来の注解では、私に理解し難かったところや不備の感じられるところもないわけではなく、そのような箇所は補注でも加えたいところなので、いささか均衡を失って長くなった。時制・染色・織物・料理・計器・経済・制度・地理・鉱業などの方面に多く、それぞれの専門家・実務家のお教えをうけたところも多い。

特に地名については、現在の読者の便を考えて、わかりきった国名の一部（たとえば、武蔵・摂津など）の外は、現在の地名に統一して注記した。もっとも、地名は絶えず動いているので、若干の例外を除いて、昭和四十七、八年ころのものと御了解願いたい。ただ、地形の変化やたび重なる呼称の変更に、新旧の地名は必ずしも重ならないので、その一端を記すにとどめたところがある。東京都にこの例が多い。が、大体のところは察知できると思う。地名については、市区町村役所・教育委員会・公私の図書館・その他、既知未知の方々の御援助を受けたところが多い。

なお、私の特に力を注いだところは、従来の語釈中心の諸注とは違って、解説的注記を多くした点である。専門外の人たちに近世文学を理解してもらうために必要なことは、語釈の詳注ではなく

て、社会・制度・経済・風俗など近世常識の解説であると思つたからである。

また、西鶴の語法は、特殊なところがあるので、頭注に余白の許す限り、注記するにつとめた。

また、近世の経済事情は、現代とは著しく異なるので、はじめは当代通貨の現行価格への換算をすべて頭注や傍注に記入しようかと考えたが、近ごろの貨幣価値の変動はあまりにはげしいので、とりやめて、付録に「近世の貨幣をめぐる常識」を入れた。御参照願えれば幸いである。

また、作品の内容について、在来 of 学界の正統派とは違った私見を、頭注のところどころに、かなり大胆に書き加えた。異端の説が読者の思索を刺激することを願つてのことである。

解説や付録も、右の観点から書いた。

一、この本をまとめるにあたって、参照した注釈書や語彙研究や論文は甚だ多いが、この本の足りないところを読者に補ってもらうために、割に手に入りやすくもあり、かつ、重要な注釈書として、次の諸著をあげておきたい。

◇三田村鳶魚編『西鶴輪講 日本永代蔵』昭和六年／七年雑誌『日本及日本人』に連載（後、昭和三十六年 青蛙房刊）。

◇藤井乙男校注『日本永代蔵』（『西鶴名作集』所収）昭和十年 講談社刊。

◇大藪虎亮著『日本永代蔵新講』昭和十二年 白帝社刊。

◇野間光辰校注『日本永代蔵』（日本古典文学大系『西鶴集 下』所収）昭和三十五年 岩波書店刊。

◇前田金五郎編『新注 日本永代蔵』昭和四十三年 大修館刊。

一、私は初めて注釈らしい試みをして、思ひの外に多くの方々のお力添えを必要とするのに驚いた。

注釈という仕事は、国文学者の長い地道な研究の集積の結果を示すものなので、それがこの注釈の基根をなしていることは、いうまでもないが、研究史の浅く雑学にわたることの多い近世文学では、専門外の方々のお力添えを得ねばならぬところが、それに劣らず多かった。簡略な注釈という性質上、斯学内外のお教え頂いたすべての方々の芳名を注記に逸したことについて、改めて御寛恕を乞い、あわせて、心から御礼申し上げたい。なお、この本も、山本澄子君の助力を得た。

昭和五十一年十二月

日本永代蔵

日本永代藏

一

大福新長者教

